

資本所得課税と資源配分

大 竹 文 雄

本書は、税制が要素資本の配分に与える影響を理論的に検討したものである。法人所得、利子所得、配当所得、キャピタル・ゲインなどの資本所得に関する課税が、企業・消費者の経済行動にいかなる影響を与えるかは、望ましい税制のあり方を議論する際には重要な問題である。著者は、いくつもの代替的の制度の中から、経済行動に対して最も中立的な資本所得税制を求めるばかりではなく、実現可能性という制約を満たす著者独自の改革案の提唱を行っている。

資源配分に対して攪乱効果を持たない「中立」的な税制を望ましい税制であるとする考え方は、租税理論では「最適課税論」と呼ばれる。最適課税論の主要な結論は、一言でいうならば、所得源泉、消費財の種類によって税率を変えることが望ましいというものである。

本書の立場も基本的には最適課税論の考え方にそった分析である。伝統的な最適課税論

が静学的な枠組みで議論を行ってきたのに対して、資本所得課税の問題を厳密に取り扱うために動学分析を用いている点が本書の特徴である。しかし、静学的最適課税論と異なっており、著者は、動学的設定のもとでの最適税率の決定ルール(ラムゼイ・ルール)を示すことを目指していない。それは、現実の税制をできるかぎり正確に取り入れた議論を行うためである。そのために、著者は、資本所得税制として、さまざまな代替的税制を「中立」性の観点から比較するという手法をとっている。

一般に、理論モデルによる経済分析は、理論的な整合性を重視するあまり、現実の制度を過度に単純化して議論することが多い。また、理論モデルをもとにして政策議論を行う場合には、理想を求めるあまり、実現可能性の極めて低い政策を主張するといったことがしばしばみられる。ところが、著者の態度にはそのような理論家の欠点はほとんどみられ

ない。

現実の税制をできる限り正確に経済モデルにとり入れるという本書の方法により、つぎのような重要な政策課題を理論的に議論することが可能になっている。すなわち、(1)法人所得税と個人所得税による配当所得の二重課税問題、(2)国際間の税制協調、(3)加速度償却制度というアメリカ税制改革が国際資本移動に与えた効果などの諸問題である。

本書は、一貫して動学的な分析枠組みを用いて分析を行っているが、最初の二章はそのための基本的な枠組みを提供するものである。まず、第一章で、フィッシャー・モデルを、続く第二章で、動学的一般均衡モデルが解説される。財政学の分野が取り扱われるのは第三章以降である。第三章で、OECD諸国の資本所得に関する税制が概観され、それらの税制のもとでの企業の最適化行動の定式化が行われる。第四章から七章までは、税制と「企業の財務構成」、「投資計画」、「産業構造」、「国際資本移動」等の諸問題との関係が扱われている。特に、第七章では、加速度償却制度の導入と廃止というアメリカの税制改革が国際資本移動に与えた影響が興味深く分析されている。第八章から第十章までの三章は、家計の意思決定が税制の分析に取り入れられ、第二章の動学的一般均衡モデルの基礎

がなされている。

第三章から第十章までは、主に現行の税制に関することがとりあつかわれているのに対し、最終章の第十一章では、既存の研究の見直しと著者独自の資本所得課税改革案が提示されている。この章は、本書全体のまとめにもなっており、技術的な問題や議論の細部に興味のない読者にとっては本章だけを読むことによって多くの知識を得ることができよう。特に、表十一・一にまとめられたさまざまな資本所得税制と中立性基準の関係は税制論者にとって有益な情報を提供してくれる。

異時点間の資源配分に対する中立性を初めとした「中立性」の観点から最も望ましい資本所得税制は、キャピタル・ゲイン型の税制である。しかし、著者によれば、キャピタル・ゲイン型税制は、現行税制からの乖離があまり

にも大きいので、実現可能性が極めて低いとされる。そのため著者は、現行税制の枠のなかで資本所得税の改革案を提示している。その内容は、「法人税の内部留保分に関する税率と個人の利子所得税率を同率にし、投資については即時償却制度を実施する」というものである。この改革により、さまざまな「中立性」が確保されるのである。

わが国の税制改革議論の進め方の特徴は、利害対立を恐れるのあまり、実現可能性を優先した議論が先走る傾向がある。しかし、税制改革が長期的な経済成長の達成を目指しているものであるならば、税制の中立性に関する厳密な議論を行ううえで実現可能性の高い改革案を提示するというのが著者のスタイルは見違ふべきである。ただし、本書は経済効果面からのみ資本所得税を検討している点に開

題であろう。現実の税制を考える場合には、分配面からの検討も必要である。資本所得課税の不備が、資産保有の不平等を加速している側面は見逃せないのである。

本書は、動学的成長モデルの基礎、M-M理論等の企業財務理論、各国の資本所得税制なども丁寧に書かれているので、学部上級から大学院における租税の経済理論・企業理論等の研究者はもちろん、政策担当者、実務家にも推薦できる。

(おおたけ・よみお 大阪府立大講師)

Capital Income Taxation and Resource Allocation. By H. W. Sinn. (Studies in Mathematical and Managerial Economics, Vol. 35) '87. xiv, 411 p. (North-Holland, NLD) MBN 8723690/ISBN 0-444-70208-3 19,250

Life Gear
森林楽
しんりんがく
第2章

リビングの
くすりの箱



※飲みやすいように
薬を区分しています

●材質：マコレ(アカデツ料)
¥ 6,000
¥12,000

自然から採った
木と革のアンサンブル。
潤いあふくもひあふれるの
知防インフキマム。

丸善